

小学校音楽科における鑑賞教育に関する一考察

市川裕加里・福島さやか

A Study of Music Appreciation in Elementary School

Yukari ICHIKAWA and Sayaka FUKUSHIMA

小学校音楽科における鑑賞教育に関する一考察

市川 裕加里*・福島 さやか**

A Study of Music Appreciation in Elementary School

Yukari ICHIKAWA and Sayaka FUKUSHIMA

概要

2017年3月に小学校学習指導要領が改訂され、2020年度に全面実施へと移行する。音楽科において、鑑賞は引き続き重要な役割を担う領域である。先行研究をとおして、鑑賞指導に関する課題の整理を行った後、小学校音楽科における鑑賞授業として第4学年「白鳥」を取り上げ、授業分析、ワークシート分析、インタビュー調査をとおして、「教材の豊かさ」「音源の工夫」「授業の構成」「教師の指示・発問・言葉がけ」の観点から検討を行った。

キーワード：小学校、音楽科教育、鑑賞

はじめに

2016年12月21日に、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」¹⁾（以下、「中央教育審議会答申」と記す。）を示した。「中央教育審議会答申」では、「第2章 各教科・科目等の内容の見直し」「7. 音楽、芸術（音楽）」において、「①現行学習指導要領の成果と課題」が示されている。課題について、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められるところである。」と記されている。今後、これらの課題に適切に対応できるよう改善を図っていくことが必要となる。

2017年3月に、小学校学習指導要領が告示された。今回の改訂では、育成する資質・能力が3つの柱に沿って整理され、教科ごとの見方・考え方も重要視されている。小学校音楽科の見方・考え方は、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること。」と整理されている。

堀尾（2015）²⁾は、「人間は、日常繰り返される生活と文化の接触のなかで発達していく。それは人間関係のなかで果たされる。今日では、その生活と文化が大きく変

わり、子どもをとりまく人間関係も、成長のすべての過程をとおして、その変化が広がっている。」と述べている。生活、文化、子どもたちの姿について、より深くとらえたうえで、教育を考えていく必要があると考えられる。

鑑賞に関してこれまでに、高萩（1974）³⁾ 寺田（1996）⁴⁾、三村（2003）⁵⁾、山本（2010）⁶⁾などの研究が行われている。史の変遷、音楽鑑賞教育論に関する研究などさまざまな研究が行われている。鑑賞指導に関して、下道（2015）⁷⁾は、これまでの鑑賞指導に関連して、「教室での鑑賞は、生徒にとって堅苦しく、型にはまった感がある。」と述べている。また、「鑑賞指導の目標は静かに聴く態度を習慣づけ、音楽の性質を理解させ、音楽の美しさを味わわせることである。教室では集中力や忍耐力、音の要素の識別能力、音楽美の価値判断力といった感受力を育てる指導が行われる。」と述べている。今後の鑑賞指導の在り方は、どのようなものであろうか。

本稿では、小学校音楽科鑑賞指導について、子どもたちが楽しみながら興味関心を高め、自発的な学びに繋がる鑑賞授業のための教師の指導法について、その在り方の一端を明らかにすることを目的とする。

1 感性を育む

1-1 発達と学びの連続性

2017年に、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が改訂された。それぞれにおいて、「育みたい資質・能力」「幼児期の終

* 福岡県大川市立官前小学校

** 福岡女学院大学

わりまでに育ってほしい姿」が示されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかには、「豊かな感性と表現」が記されており、豊かな感性や表現も大切にされている。

また、『小学校学習指導要領 音楽科』の目標では、感性を育むことが、『中学校学習指導要領 音楽科』の目標では、感性を豊かにすることが、そして『特別支援学校学習指導要領 音楽科 (小学部・中学部)』においても、目標では、音楽的な見方・考え方を働かせることが示されている。音楽的な見方・考え方は、学習指導要領解説において、「児童自ら、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けて考えているとき、音楽的な見方、考え方が働いている。」⁸⁾と記されている。このように、音楽的な見方・考え方は、感性とも深く関連している。さらに学習指導要領解説では、「音楽的な見方・考え方は、音楽的な見方・考え方を働かせた学習を積み重ねることによって、広がったり深まったりするなどして、その後の人生においても生きて働くものとなる。」⁹⁾と記されている。以上のように、感性は、乳幼児期から生涯にわたって、人々と関連していくこと、学びを積み重ねることによって、豊かになっていくことが考えられる。

1-2 感性

桑子 (2001)¹⁰⁾ は、感性とは、「環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造していく、価値に関する能力」と述べている。さらに「感性はたんに外界からの情報をキャッチするだけの受動的な能力ではなく、環境とのかかわりのなかで自己の存在をつくり出し、ゆく能動的、創造的な能力となる。」と述べている。

「中央教育審議会答申」¹¹⁾ では、「特に重要な「感性」の働きは、感じるという受動的な面だけではない。感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくことなども含めて「感性」の働きである。また、「感性」は知性と一体化して創造性の根幹をなすものである。このため、芸術系教科・科目が、子供たちの創造性を育む上でも大切な役割を担っている。」と記されている。

以上のように、環境とのかかわり、能動的な能力、知性ととも感性をとらえていく視点や、など、さまざまな観点から考えていくことも重要となることが示唆される。

2 鑑賞・鑑賞指導

鑑賞¹²⁾ について、『新音楽辞典 楽語』(1983)において「芸術作品を対象として、作品の形式や内容を理解し享受¹³⁾ する行為。音楽鑑賞とは、音楽を音楽として聴く主体的能動的行為。」と記されている。

また、鑑賞指導¹⁴⁾ について「聴取をとおして広く音楽

作品を理解し享受する学習指導面をさしている。学校における鑑賞指導は、主として音楽的興味を喚起することに目的を置いた興味的聴取の段階から、音楽の内容を音楽的に理解させるための理解的聴取に中心がおかれようが、いずれにしてもそれぞれの段階に応じてこれに没入し、享受させることが大切だといえよう。」と記されている。

木村 (2001)¹⁵⁾ は鑑賞指導について「『音楽を聴くこと』を、単に音楽を受容するだけでなく、音楽の美しさや楽しさをみずから進んで味わおうとする態度や聴取の能力をめざした積極的な活動」と記している。

以上のことから、鑑賞を主体的能動的行為、鑑賞指導を積極的な活動ととらえる視点、及び段階的な学びの視点が示唆される。

3 音楽科鑑賞教育

浜野 (1967)¹⁶⁾ は、鑑賞は「知的な面や道徳的な面でも使われることがあるが、一般的には美に関する審美的情操を意味するもので、類似した言葉として「翫賞」¹⁷⁾、「観照」¹⁸⁾、「享受」などがある。これらの言葉が表すように、美の価値を思考や行動によってというよりは感情によってとらえようとするものである。」と記している。そして、「学校教育の音楽に関する学習は、すべて鑑賞であるということが出来る。鑑賞は歌唱や器楽、あるいは創作、聴取の動機となるべきである。また逆に歌唱や、創作、聴取それぞれの目的は、より深い鑑賞能力である。」と述べている。このことから、鑑賞が感情とも密接に関連していることや、表現領域と鑑賞領域が密接に関わること、音楽科において重要な役割を担っていることが示唆される。

高萩 (1974)¹⁹⁾ は、音楽の鑑賞教育について「音楽の鑑賞教育は、美に対する感受性を高めるための人間教育であり、「すべての人間に必要なものとしての音楽教育」の中核となるものである。」と述べている。さらに、音楽鑑賞活動の段階として「聞いて楽しむ」「聞いて理解する」「聞いて価値判断する」という3つの段階があること、感覚的なものから精神的なものへとこれらの段階は次々と積み重ねられていることを示している。

4 段階に応じた鑑賞指導

平成27年度版教育出版の指導書には、第1学年から第6学年まで学習指導のポイントに「鑑賞の指導」が記されている²⁰⁾。その中で、ねらいとそのねらいを実現するための記述が含まれている。学年ごとに、ねらいとそのねらいを実現するための記述は異なっているが、その内容には大きな差異はない。各学年の活動例についてまとめたものが、表1である。

表1 指導書における各学年の鑑賞指導 活動例

学年	活 動 例
1	主な旋律を口ずさんだり、音楽に合わせて身体を動かしたり、 <u>楽曲の気分が異なる音楽を聴き比べたりして、音楽を聴くことに親しみ、思いを広げながら聴くことができる活動。</u>
2	リズムや旋律が反復したり問いと答えのように掛け合ったりするような <u>音楽を形づくっている要素の係わり合い</u> を感じ取りながら、子ども自らが音楽を聴くことに親しみ、思いを広げながら聴くことができる活動。
3	楽曲に合わせて体を動かしたり、 <u>曲想の異なる楽曲や対照的な部分を聴き比べたり、主な旋律を口ずさんだり、楽器で演奏したりして音楽を特徴づけている要素の働きと効果を感じ取る</u> ことができるような活動。
4	曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表し、それらを友だちや先生に伝えることにより、 <u>友達の感じ方のよさや違いに気が付き、自分の感じ方を広げる</u> などの活動。
5	体を動かす活動を通して <u>音楽の移りゆく変化を感じ取ったり、曲想の異なる楽曲や楽曲の中の対照的な部分を聴き比べたり、我が国の音楽と諸外国の音楽などを聴き比べる</u> ことで、曲想や音楽の特徴の違いを感じ取ったりするなどの活動。
6	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったこと <u>の理由を音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みに結び付けて自分なりの言葉で表す</u> ことで、音楽を特徴づけている要素と音楽の仕組みのかかり合いを理解するなどの活動。

(平成27年度版『音楽のおくりもの教師用指導書 指導編・研究編』教育出版、第1学年、及び第3学年～第6学年 p.19、第2学年 pp.18～19をもとに筆者作成。)

・一重下線は、段階に応じた活動、二重下線は楽曲の何に注目して聴くかについてあらわれている箇所を示している。

学年が進むにつれて、徐々に周りの人々と想像したことや感じ取ったことを共有しながらさまざまな音楽に触れ、最終的に、理解することを目指したものとなっている。また、何に注目して聴くかについては、徐々に音楽の諸要素と関連づけて学ぶ活動へと移り、最終的には楽曲を聴いて、想像したこと、感じ取ったことについて、なぜそのような感じがするのかを自分の言葉で表すことを目指したものとなっている。このように、段階をふんでいることが分かる。

5 鑑賞教育の課題

国立教育政策研究所教育課程研究センター『特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）』（2010）²¹⁾によれば、「小学校 鑑賞に関する問題」では、4つの部分から成る音楽を聴き、どのような様子が表されているかについて約7割の児童が記述しているが、その音楽の強弱の変化をとらえて記述した児童は約2割であったことが示されている。【授業改善】として、音楽の要素（音色や強弱など）のうち、児童が感じ取りやすいものを取り上げて、その要素に自ら気付いたり、その要素と他の要素とのかかり合いを聴き取ったりしながら曲想の感じ取りを深めるような指導の工夫、が挙げられている。このことから、子どもたちの学びに沿って、音楽と用語や記号、音楽の諸要素とを関連づけて理解する、学びを深めるような手立てを工夫することなどが必要になると考えられる。

学校教育における音楽鑑賞教育の目標として渡邊(2006)²²⁾は、「音楽美を享受し得る下地」を何らかの形で作っていくことが、音楽鑑賞教育の重要な課題」としている。そして、その音楽美を享受するにあたって

の前提条件は「音楽を体験する」ことである。要するに「音楽を自分の耳で聴く」ことである。と記している。「音楽を自分の耳で聴く」ということには、能動的な鑑賞の態度が必要である。能動的な鑑賞態度として渡邊は「自分から進んで音楽を求めて聴こうとする態度」とし、逆に受動的な鑑賞態度は、「何か説明を聞かないと音楽が聴けないという姿勢」と述べている。受動的な態度において「何か説明を聞かないと」という文言から、音楽科鑑賞において教師が主導で進められる授業では、能動的な鑑賞態度を育てることが難しいと考えられる。そのため、教師の授業計画が重要な要素となる。

今(2014)²³⁾は「日本の鑑賞授業は、教師が作品に対する解説を行い、その後CDを鑑賞、子どもたちが鑑賞した楽曲作品に対して、感想を記述するという学習パターンがこれまで往々にして行われてきた。しかしながら、このような学習は、子どもたちが受身になりがちで、活発な学習活動へと展開しづらいという課題が見受けられる。」と述べている。さらに津田(2010)²⁴⁾は「鑑賞では感想文を書かせるものの、音楽的内容が薄く作文力で評価しがちになる。その理由として、子どもが音楽そのものを豊かに感じ取れていなかったり、感じ取れていたとしてもそれを語る術を学んでいなかったりすることが考えられる。」と述べている。

以上のことから、受身にならず、子どもたち自身が感じ取ること、語る方法などについて、再考する必要があると考えられる。

6 音楽活動における楽しさ

学習指導要領（小学校音楽科）の目標(3)において「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛

好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。」と示されている。学習指導要領解説では、「音楽活動の楽しさを体験する」²⁵⁾とは、主体的、創造的に表現や鑑賞の活動に取り組む楽しさを実感することとしている。また、児童が体験する音楽活動の楽しさは、いろいろな感じ方や考え方に接したり、音楽を味わって聴くことができたりしたときなどに、一層豊かになることが示されている。

根岸(1999)²⁶⁾は「楽しいこと＝何かがわかること」と記しており「何かがわかるということは、音楽史的な特別の知識を得ることではなく(もちろん知識も無関係ではないが)、音楽の身振り、とりわけその変化を具体的に感じ取り、その意味を探る気持ちになる、ということである。」と述べている。このことから、楽しいことと何かがわかることは密接な関係であることが考えられる。また、福井ら(1999)²⁷⁾は、鑑賞活動における楽しさに関して、生徒が“楽しい”と感じる時について、(1)活動そのものが楽しい時、(2)心を開いて自分なりの聴き方で聴くことができ、それが認められる時、(3)授業

の中で新しい発見があった時、(4)音楽を聴いて心を揺さぶられた時の4点を挙げている。

以上のことから、子どもたちの状況を正しくとらえ、分析、判断できる教師の力が重要となることが示唆される。

7 音楽鑑賞授業

小学校音楽科における鑑賞授業の例として、《白鳥》を取り上げる。

7-1 授業の概要

A小学校における《白鳥》の音楽鑑賞授業についてまとめたものが、表2である。授業者は、B教諭である。授業は、2017年6月27日に、音楽室にて行われた。4年生全12名が出席していた。音楽室には、グランドピアノ、スピーカー、子ども用の机と椅子、教材庫、掲示板が備えられている。楽曲は、カミーユ・サン＝サーンス(1835-1921、フランス)作曲「動物の謝肉祭より《白鳥》」が提示された。めあては、「せんりつの特徴

表2 第4学年 《白鳥》の鑑賞

	児童の活動	教師の支援	指導の重点
0分	○《サモア島の歌》を歌う。	○ピアノ伴奏をしながら、「乗り遅れないよ。」と言葉掛けを行う。	
3分	○ワークシートに名前を記入する。 ○めあて せんりつの特徴を感じ取りながら聴こう。	○ワークシートを配布し、黒板にワークシートを拡大したものを貼る。 ○「今日は《白鳥》の旋律の特徴、 <u>旋律はメロディー</u> のことね。それを感じ取りながら聴こうとしています。」と言葉掛けを行い、めあてを示す。	○ワークシートは授業の流れに沿っている。また、拡大したワークシートは児童に配布したものと同じものである。
5分	○《白鳥》、及び作曲者の説明を聞く。	○サン - サーンズの肖像画を貼る。ワークシートにも記入されているサン＝サーンスについての説明を行う。	○ワークシートのサン - サーンズについての説明では、年齢も示しながら説明を行い、児童にとって <u>身近なもの</u> となるようにしている。
10分	○「動物の謝肉祭」の中の《白鳥》以外の曲を聴き、動物をあてるクイズに答える。 ○児童が聴きたい曲をリクエストする。	○ <u>曲の特徴をあらわすヒント</u> を出しながらクイズを進める。 ○クイズで出なかった他の曲を児童のリクエストで提示する。《ピアノスト》《水族館》を提示する。	○《カンガルー》《鳥》《亀》を取り上げ、クイズの問題とし、その後児童が <u>楽曲のどこに着目して聴くのか</u> 、考えられるようにしている。【1】 ○ <u>曲の雰囲気、曲の感じを生み出しているもの、作曲家が大切に考えていること</u> などに着目するよう促している。【2】

20分	○ <u>曲想</u> を生み出しているポイントについて理解を深める。 ○白鳥で <u>使用されている楽器</u> について理解を深める。	○「 <u>曲の感じを生み出しているもの</u> 」について「 <u>旋律の動き</u> 」「 <u>音色</u> 」「 <u>速さ</u> 」「 <u>強弱</u> 」の説明を行う。 ○白鳥で使用されているチェロを含めその他の弦楽器（コントラバス、ビオラ、バイオリン）について学び、 <u>チェロが《白鳥》で使用されていることを示す</u> 。コントラバスに関連して《象》を提示する。	○教科書では、「きくときのポイント」として「せんりつの音の上がり下がり」「リズム」「強さ」「速さ」と記されている。 ○教科書では、バイオリンとチェロの比較が行われているが、本時では、 <u>弦楽器全般を提示し音色の違いについて考えられるように配慮している</u> 。【3】
30分	○白鳥の第1印象をワークシートに記入し、発表する。	○白鳥を1分程度流す。白鳥の第一印象をワークシートに記入するよう言葉掛けを行う。	○まず、 <u>楽曲を短く聴く</u> ことで、 <u>直感的なもの</u> を書くようにしている。【4】
35分	○白鳥を1曲全て聴き、思い浮かぶ白鳥の情景（始め→中→終わり）をワークシートに記入し発表する。	○次に、《白鳥》の曲全体を提示する。白鳥が「いつ、どんな場所で、何をしているか」について「 <u>始め、中、終わり</u> 」で <u>自分の想像を記入するよう言葉掛け</u> を行う。 ○《白鳥》のピアノ演奏について、説明を行う。	○楽曲全体を聴き、 <u>楽曲がどのように変化しているのかを聴くことができるようにしている</u> 。【5】
40分	○白鳥を演奏している映像をみて、演奏の仕方を学ぶ。	○白鳥を実際に演奏している映像を提示する。演奏の仕方から「 <u>曲の感じを生み出している特徴</u> 」について提示する。	○白鳥のなめらかな演奏はどのようになっているのか、演奏している映像を見ることで、 <u>演奏の方法にも興味をもつことができるようにしている</u> 。【6】
45分	○学習の振り返りを記入する。	○「今日の <u>《白鳥》</u> を聴いてどうでしたか。」「何が分かりましたか。」とワークシートに記入するよう言葉掛けを行い、学習の振り返りを行う。	
50分			

・表中の下線は、特に重要な内容を示している。【1】～【6】は、聴く活動が現れている箇所を示している。

を感じ取りながら聴こう。」であった。

7-2 授業の分析

表2のようにまず、本時では、サン＝サーンスがどのような人物であったのか、説明が行われている。生没年月日についても確認が行われ、その後、2歳、3歳、10歳、13歳でどのような生活をしていたのかが紹介された。また、詩、天文学、数学などにも関心が高かったことが紹介された。このことによって、子どもたちは、興味をもち、自らの生活と関連づけることも考えられる。表中に示した【1】と【2】では、《白鳥》を聴く前に、他の動物の楽曲を聴き、何をどのように聴くのか、確認されている。動物をあてるクイズ形式で提示されており、子どもたちは興味をもって参加することができる。《カンガルー》では、リズムについて確認された。子どもたちには、「テンッ、テンッ、テンッ、テンッ」のリズムとして言葉で説明された。《鳥》では鳥のさえずりがきこ

え、音色に着目をしたこと、そしてどんな楽器で演奏するとそのような音に聞こえるのかが、確認されている。また、《亀》では速度に着目し、《天国と地獄》との比較を行い、2度聴いて具体的に確認が行われている。《亀》を鑑賞する前には、教師は「さ、音が小さいです。スピードがゆっくりです。これに合う動物はどれでしょう。」と言葉掛けを行っている。この言葉掛け、及び実際の演奏の内容から、多くの子どもたちは、ワークシートに記された動物のなかから、亀を予想しながら聴いていると考えられる。《カンガルー》や《鳥》のクイズの際に、教師は、なぜその動物と分かったのか、理由を尋ねていた。そのため、《亀》の演奏後には、教師から尋ねられる前に「のろのろしてたから。」と、進んで理由も答える子どもも見られた。また、「先生、今度僕、動物の謝肉祭を聴いてみる。」と発言している子どもも見られた。このことから、教師の提示により、児童が興味をもち、自ら聴いてみようと思ったことが考えられる。

その後、子どもからのリクエスト曲《ピアニスト》《水族館》においても、一貫して、音楽の諸要素「旋律」「音色」「速さ」「強弱」に関連した学びが深められていく。《水族館》では、教師と子どもの対話のなかで、ハリポッターのような、神秘的な曲想であることが現れる。その後「もしかしたら、サン＝サーンスさんは、魚になったんじゃない？」と意見を述べる子どもも見られた。子どもが楽曲のイメージを膨らませている様子がうかがえる。

【3】では、《白鳥》を演奏している楽器チェロと、コントラバス、ビオラ、バイオリンを比較して聴取することにより、白鳥のイメージと、チェロの音色が合っていることを子どもたち自身で確かめる活動が行われている。ここでは教材の豊かさが現れている。また、教師の指示、発問、言葉掛けに関して、「みんなも、サン＝サーンスさんと同じ気持ちかどうか、ちょっと聴いてみてください。」と子どもたちが聴く活動に集中できるような言葉掛けが行われている。【4】では、《白鳥》を短く聴き、子どもたちは、第1印象を感じ取っている。【5】では、《白鳥》全体を聴き、楽曲の構造について、変化に着目しながら、白鳥がいつ、どんな場所で、何をしているか、について各自で想像しながら聴く活動が行われている。この内容は、ワークシートに記されている。また、ピアノの演奏は、リズムが細かく、「チャチャチャチャ、チャチャチャチャ」と音が少し多いことも指摘されている。音源に関して本時では、CDに含まれた楽曲の提示は、CDラジカセではなく、オーディオが用いられている。【6】では、映像を見ながら、《白鳥》を鑑賞する活動が行われている。演奏方法にも着目しながら聴くよう、言葉掛けが行われている。

森保(2017)²⁸⁾は、鑑賞指導の工夫(1)聴き方の工夫について、以下の5点を挙げている。①表現しながら聴く。②発見しながら聴く。③比較して聴く。④予想して聴く。⑤取り出して聴く。このように、聴き方にもさまざまな方法が存在する。今回の授業のなかで【1】から【6】の聴く活動では特に、②、③、④、⑤が現れており、さまざまな聴き方の工夫が行われている。

以上のことから本時の授業では、「教材の豊かさ」「音源の工夫」「授業の構成」「教師の指示・発問・言葉掛け」に配慮されていると考えられる。

授業がさまざまな方法で聴く時間、意見を発表する時間、ワークシートをまとめる時間等で構成されており、めあての内容を中心に、音楽史、音楽的知識に関する内容等が含まれさまざまな広がりをもったものとなっている。

7-3 ワークシートの特徴

本時に使用されたワークシートでは、めあてが示され、1. サン＝サーンスについて、2. 組曲「動物の謝肉祭」全14曲について、3. 演奏されている楽器(弦楽器)について、4. (1) 曲の感じ、(2) 思い浮かぶ白鳥の情景(始

め→中→終わり)、(3) 曲の感じを生み出している特徴(チェロとピアノ)、学習を振り返って、で構成されている。2.と3.の間には、＜ポイント＞曲の感じを生み出しているものを記す欄も含められている。このポイントの箇所で、「旋律の動き」「音色」「速さ」「強弱」を確認することで、その後の4.においても、より、子どもたちが自信をもってワークシートを記すことができることが考えられる。また、音楽の諸要素と楽曲の感じや情景を結び付けることなどにもつながっていくことが考えられる。

さらに本時では、音楽鑑賞授業を中心に授業が行われたが、他の音楽科の授業内で「音楽鑑賞カード」を用いて、15分程度で鑑賞が行われる場合もある。日付、曲名、作曲者、主な楽器、感じたことや気が付いたことを記す欄、メモ欄が含まれている。「曲の様子や感じを言葉で表すとき、ヒントとして使う」ための語群が示されており、30示されている。「明るい」「暗い」「おだやかな」「かがやかしい」「おどけたような」などが示されている。このことは、子どもたちが曲想などについて言葉で表現する際にも、助けとなる情報となることが考えられる。

子どもたちの振り返りの記述からは、曲想に関する内容が多く記されていた。同時に作曲家や楽器の音色や奏法、音楽の諸要素に関する記述(速さなど)も見られる。曲想に関する記述は12名中6名、作曲家に関する記述は12名中4名、楽器に関する記述は12名中5名、音色に関する記述は12名中2名で見られた。

日本音楽教育学会会長諮問プロジェクト調査報告書(2015年10月20日)²⁹⁾では、心に残っている鑑賞曲は、イメージや雰囲気強い印象であることが示されている。深く印象に残った楽曲は、後になっても心に残る楽曲になることが考えられる。

7-4 インタビュー調査

B教諭への音楽科授業や音楽鑑賞に関する内容について行ったインタビュー調査の結果を示したものが表3である。インタビュー調査は、2017年9月8日に行った。

表3のように鑑賞は、表現、読譜、学校行事、他教科、などさまざまな内容と関連している。音楽劇などの総合芸術とも関わりがあり、低学年から、他教科や行事等との関わりも含め、全体的な計画のなかで、鑑賞教育をとらえていく必要がある。楽譜は曲を視覚的に見ることができ、曲を感じる手がかりとしても大切であり、音楽的知識に関する学びとともに鑑賞活動を考えていくこととなる。

7-5 考察

授業の分析からは、「教材の豊かさ」「音源の工夫」「授業の構成」「教師の指示・発問・言葉掛け」に配慮されていると考えられる。このことは、教師自身が鑑賞することの重要性を意味しているとも考えられる。また、「教師の指示・発問・言葉掛け」に関しては、子どもたちの実態を把握していることが必要不可欠である。また教師は、

表3 インタビュー調査の結果

	インタビューの項目	回 答
1	子どもたちの音楽授業中の様子と普段の様子の違いがあるのか。あるとすればどんなところか。	違いはほとんど見られない。小学校低学年から発表を含め表現することに抵抗がないように心がけて指導している。
2	1時限を鑑賞でおこなうことは多いのか。	1時限(45分間)を鑑賞で行う授業は年に数回しかない。
3	音楽と美術との関連や他の教科との関連はどのようにされているのか。	具体的には、国語と関連させスイミーの音楽劇を行った。国語で学習したことから台詞、歌唱について意味づけをしながら行う。場面ごとに強弱や速度など自分たちで考えながら行っていく。
4	表現と鑑賞は相互的と学習指導要領にされているが実際の授業ではどのように示されているのか。	低学年での鑑賞では、表現と関連させた活動が多い。具体的には、付点のリズムを感じるために実際にスキップを行ったりする。
5	楽譜、読譜、記譜、絵譜についてどのように考えていらっしゃるのか。	楽譜は、曲を視覚的に見ることができ、曲を感じる手がかりとして必要である。
6	全校で行う音楽の取り組みでどのようなものがあるか。	芸術鑑賞会、コンサート、劇、全校での合唱が行事として実施している。
7	鑑賞についてどのようなイメージがあるか。	鑑賞は、表現領域の歌唱や器楽などにも繋がる。どんなものに対しても「きく」という力が大きい。その支えとなるものとして鑑賞が大事。

教材研究などにもとづいた、学習が深まった子どもの姿を具体的に描くことも重要となると考えられる³⁰⁾。

表2のように、「せんりつの特徴を感じ取りながら聴こう。」というめあてに沿って、活動が行われていた。活動のなかでは、曲想を生み出すポイント、使用されている楽器、楽器の奏法、作曲家についての学びと関連させて学習することにつながられており、さまざまな学びと関連していることが特徴である。聴き方に関しては、比較して聴く、予想して聴く、取り出して聴く、などの聴き方が現れており、工夫されている。さらに、《水族館》の鑑賞では、「もしかしたら、サン＝サーンスさんは、魚になったんじゃない?」と述べている子どもがいる。このことから、子どもが「動物の謝肉祭」の世界に入り込み、イメージを膨らませている様子が考えられる。さらに教師は、「今日はみんないい耳、心をしています。聴いて、それぞれこんな動物ってあてられたということは、曲の感じを生み出しているものをみんなはちゃんと感じ取ったからです。」と述べている。よい耳、よい心のような表現、教師の言葉掛けは、子どもがじっくりと音楽を味わう活動とも深く関連しているとうかがえる。

表2中の【3】では、バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスの音色が比較聴取されており、子どもたちは実感をともなって学ぶことができると考えられる。また、他の弦楽器と比較しながらバイオリンを学ぶことは、さらに学びを深めていくことに関連していくと考えられる。そして【6】では、チェロの演奏方法を確認しながら鑑賞することで、旋律の特徴と楽器の奏法とが深く関連づけられている。さらに教師は、《カンガルー》のリ

ズムを「テンッ、テンッ」と言葉で表現、ピアノ演奏を「チャチャチャチャ」と言葉で表現するなどして、子どもたちが理解しやすいような表現を用いている。

本時の授業では、ワークシートにおける子どもたちのふりかえりの記述のなかで、作曲家や楽器に関する記述も多く見られた。授業冒頭での作曲家の紹介、授業終了時のDVD視聴も影響を及ぼしていると考えられる。授業終了時には、子どもたちから、どの会場での演奏なのか、また、サン＝サーンスは、どこで演奏を行ったのか、などの疑問が現れていた。このことから、子どもたちが、鑑賞活動にかなり集中している様子がうかがえる。

おわりに

音楽科は、感性を育むことや人間教育に関連して、重要な役割を担っている。音楽鑑賞授業の分析からは、子どもたちが興味・関心をもつために教師によって、さまざまな工夫や配慮が行われていることが明らかになった。それらは、子どもたちの「もっと聴きたい」「もっと学びたい」、といったより深い学びにもつながっていくと考えられる。そのためには、教師が普段から子どもたちの姿、学習状況をよくとらえておく必要がある。分かることには自らの達成感、周りからの肯定的なものが得られることにより、自己肯定感がえられ、結果としてそれが「楽しさ」へと繋がる場合もある。それゆえ、授業導入部分の「楽しさ」のみならず、授業を通して感じられる「楽しさ」が必要と考えられ、教師の教材研究や自己研鑽が重要である。子どもたち自身が感じ、考え、学びが深まり、発展していくような手立てについて、今後さ

らに詳細に検討していく必要がある。

注

- 1) 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」 p.161. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm [2019年2月6日閲覧]。
- 2) 堀尾輝久『人間形成と教育—発達教育学への道—』、岩波書店、2015、p.123。
- 3) 高萩保治『音楽鑑賞教育法』音楽之友社、1974
- 4) 寺田貴雄「須永克己の音楽鑑賞教育論の研究 (2) 「音楽教育と蓄音機の利用」(1922) における Music Appreciation for Little Children (1920) の位置とその意味」教育学研究紀要42 (第2部)、中国四国教育学会、1996、pp.351-356。寺田貴雄「田辺尚雄の音楽鑑賞論—「音楽の聴き方」(1936) を中心として」『音楽教育学』27 (2)、1997、pp.1-10。寺田貴雄「草川宣雄の音楽鑑賞教育論」『年報いわみざわ』(26)、2004、pp.33-44。 などがある。
- 5) 三村真弓「草川宣雄の音楽鑑賞教育論」『音楽文化教育学研究紀要』(15)、2003、pp.1-13。「青柳善吾の音楽鑑賞教育観」『エリザベト音楽大学研究紀要』(25)、2005、pp.27-36。「井上武士の音楽鑑賞教育観」『音楽文化教育学研究紀要』(18)、2006、pp.1-12。「金森次郎の音楽鑑賞教育観」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』(55)、2006、pp.409-418。「山本壽の音楽鑑賞教育観」『音楽文化教育学研究紀要』(19)、2007、pp.1-16。 などがある。
- 6) 山本文茂『戦後音楽鑑賞教育の流れ - 財団誌『音楽鑑賞教育』は何をしたか』財団法人音楽鑑賞教育振興会、2010
- 7) 下道郁子第12章第1節「これからの鑑賞指導」、橋本美保・田中智志監修・加藤富美子編著『教科教育シリーズ⑤音楽科教育』2015、p.185。
- 8) 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 (小学部・中学部)』開隆堂、2018、p.143。
- 9) 同上
- 10) 桑子敏雄『感性の哲学』、NHK ブックス、日本放送出版協会、2001、pp.3-4。
- 11) 中央教育審議会 (2016)、前掲、p.163。
- 12) 浅香淳編『新音楽辞典 楽語』音楽之友社、1999、p.151。
- 13) 「享受」あるものを受けおさめること。多く精神的、物質的な利益を受けて、それを味わい楽しむことにいう。尚学図書編『国語大辞典』小学館、1981、p.672。
- 14) 浅香淳編、前掲書、p.152。
- 15) 木村次宏 吉富功修編著『重要用語300の基礎知識⑧音楽科』明治図書、2001、p.174。
- 16) 浜野政雄『音楽教育学概説』、音楽之友社、1967、pp.161-181。山本 (2010) p.14では、浜野氏は、音楽の「鑑賞指導」という教育的な営みに対して、最も簡潔かつ的確な概念整理をしたと述べられている。
- 17) 「翫賞」風景、芸術作品などを味わい楽しむこと。鑑賞。尚学図書編『国語大辞典』小学館、1981、p.584。
- 18) 「観照」主観をまじえないで、冷静に現実をみつめること。美学で、美を直接的に認識すること。美意識の知的側面

の作用を表わす概念。尚学図書編『国語大辞典』小学館、1981、p.583。

- 19) 高萩保治『音楽鑑賞教育法』音楽之友社、1974、p.10、p.33。
- 20) 『平成27年度版 音楽のおくりもの教師用指導 指導編・研究編』教育出版、第1学年、及び第3学年～第6学年 p.19、第2学年 pp.18-19。
- 21) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『特定の課題に関する調査 (音楽) 調査結果 (小学校・中学校) 2010年7月 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/index.htm [2019年2月6日閲覧]。小学校については、H20年12月3日～H21年2月27日に約110校、約3000人を対象として調査が行われた。
- 22) 渡邊学而『子どもの可能性を引き出す 音楽鑑賞の指導法』音楽鑑賞教育振興会、2006、pp.26～31。
- 23) 今由佳里「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第65巻、2014、pp.49-54。
- 24) 津田正之、学校教育研究所 (編) 第3章6音楽「音楽科における指導のポイント」『新しい教育課程における言語活動の充実』学校図書、2010、pp.108-109。
- 25) 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 音楽科編』東洋館出版社、2018、p.14。
- 26) 福井昭史、根岸一美、桑原章寧、三船里佳、古殿まり「課題研究Ⅰ 音楽の授業における楽しさとは—その3鑑賞活動を中心として—」『学校音楽教育研究』3、日本学校音楽教育実践学会、1999、pp.1-13。
- 27) 同上
- 28) 森保尚美 第2章 小学校音楽科の内容 第2節 鑑賞、吉富功修・三村真弓編著『第3版 小学校音楽科教育法』ふくろう出版、2017、pp.33-34。
- 29) 日本音楽教育学会 (2015年10月20日) 会長諮問プロジェクト調査報告書～子どもたちと考える教科音楽～ http://日本音楽教育学会.com/pdf_files/view/166 [2020年2月12日閲覧]。
- 30) 津田正之「学習が深まった子供の姿を描くことの重要性」『初等教育資料』No.948、2017、pp.48-49。

文献

- 厚生労働省『保育所保育指針解説 平成30年3月』フレーベル館、2018
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』フレーベル館、2018
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレーベル館、2018
- 文部科学省『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 音楽編』教育芸術社、2018

付記

本論文は、平成29年度修士論文 市川裕加里『音楽科鑑賞授業に関する研究—小学校音楽科鑑賞指導法を中心として—』の一部に加筆・修正を行ったものである。研究に協力して下さった皆様に心より感謝申し上げます。